第113回

日中経済交流研究会　2月例会報告

－プラスワン・例会・広報委員会合同企画－

長引くコロナ禍でも、着実に一歩前へ！

日時　2022年2月14日（月）18:30～／場所　オンライン（Zoom）／参加人数　53名

第一部

～世界を舞台に活躍する三光通商(株)が10年先の市場としてアフリカを狙う理由～

三光通商（株）西村　隆 氏

三光通商（株）の業務内容と沿革

今年設立50年目で幅広い地域に中古農業機械や中古建設機械、それらに関する機械器具の貿易販売をされている。西村氏は長女誕生がきっかけで自身の長男の立場を自覚され、経営理念などもなく経営の方法もわからないまま2003年社長を引き継がれた。当初は、北米向けにボルト、ナット、ネジを輸出している会社だったが、異業界の中古トラクターの輸出に挑戦。のちに中古建設機械の輸出へとつながった。また、ベトナムで中古トラクターを整備、塗装をして諸外国に納入する3カ国間貿易もされている。輸出の際は、コンテナにできる限り隙間なく詰め込むために機械や機器はバラバラに分解され効率よく納めて出荷。最近のコンテナの単価上昇に伴い、輸送費がより厳しくなっていると感じた。

アフリカ地域での活動と今後の傾向

アフリカの多くの国は日本貿易保険のリスクランクでは最低水準（リスク最悪）で、治安が悪いため、携帯のアプリやクレジットカードなどのキャッシュレス決済が主流である。また、食料不足のイメージがあるが、流通が追い付かずロスが多く、食料不足ではなく流通インフラ不足といえる。アフリカ支援のためJETROなどでも輸出ビジネスの援助を積極的に行っている。これらの公的情報機関を使用し、毎年、ネットワーキングフェアで交流を持ち、ビジネスの種まきをされている。人口は2050年に約22億人になると予測され、現在の情勢が改善すれば大きなビジネスチャンスになると考えて新規開拓を決定。後継者の牧田氏も、技術レベルはインドや中国のレベルには追い付いていないが、対等のレベルになった時に新規参入するのでは遅く、そうなる前に参入するのが今だといい、西村氏と一致した考えであった。

第二部

～ミャンマーの現状と今後の課題～

EXVISION Myanmar Co.,Ltd.
末光　伸隆 氏

ミャンマーの現状

ミャンマーは日本から直行便で約7時間の距離にある。人口約5,000万人、多民族国家で70パーセントがビルマ族の国である。2010年には中央に白い星が入った国旗へと変更され、2011年から民主化へと進みはじめる。民主化の進展は3歩進んで2歩下がるような状況であり、過去にもクーデターが頻繁に起こっている。日系企業は423社が進出しており、主に工業、建設、流通、サービスが多くを占める。中小企業の業務システムは、ほとんどがクラウド環境で構築されている。現在は二政府状態のため、税率や年度が二つ存在するが、実質これまでの国の機関を引き継いでいる国軍傘下の機関が機能している。

経歴と展望や課題

末光氏は前職にてベトナム駐在の御経験がある。帰国後にもう一度海外でビジネスをしたいという思いで退職され、2014年10月にマンダレーにて起業された。ミャンマーを選んだ理由は、国民性が良く「最後のフロンティア」と呼ばれていたからである。良い会社にするには人が重要であり、それは国内も海外も同じ。現地スタッフに期待はしつつも、依存しすぎない関係を保ち、フォローとリカバリーを徹底している。新入社員には研修などを通して理念を共有し、決算内容を開示している。今後の展開としては、3年から5年先のインフラ構築だけではなくサイバーセキュリティー対応などのプラスαを提供していきたい。目標はミャンマーでナンバーワンのICTプロフェッショナルサービスプロバイダーになること。そして、いつかは現地スタッフに現事業を任せ、新たな場所で違うことにチャレンジしていきたいと考えている。

【報告を聞いて】

お二人とも現状に満足することなく、先見の明を持って常に一歩前に出て進んでいこうとする力が強い方々だと感じた。住み慣れた場所から離れてビジネスをする際、さまざまな困難や課題がつきまとい不安になるが、報告を聞いているとその不安を払拭できるような、そんな勇気をもらえる内容であった。

文：日中経済交流研究会　広報委員会　（株）北村製作所　北村　裕嗣

【エピソード】

幅広く海外とお取引をされている西村さんへ取材をした時から「この方の感性は刺激になる」とワクワクしました。ミャンマーからは、困難な情勢の中、末光さんの心情を聞くことができました。世界は広い！刺激あふれる日中に乾杯！

文：日中経済交流研究会　プラスワン委員会　（株）エーディエフ　島本　敏